

岩手県紫波西部地区の教育課題に応じた小中一貫のモデルカリキュラム (その2)

～算数・数学および外国語について～

田代 高章・菅野 弘*, 侘美 淳**, 阿部 尚史・川村 一真・佐々木 龍己・大村 岳・
伊藤 汐里・石田 克幸・田村 紘大・村上 友香***
(令和3年2月19日受理)

TASHIRO Takaaki, KANNO Hiroshi, TAKUMI Jun, ABE Naoshi, KAWAMURA Kazuma,
SASAKI Tatsuki, OMURA Gaku, ITO Shiori, ISHIDA Katsuyuki, TAMURA Kodai, MURAKAMI Yuka

Development of a Model Curriculum for Integrated Elementary and Junior High School Education for the Western
Area of Shiwa Town (2): Focusing on mathematics and English

要 約

本研究は、平成29(2017)年に改訂告示された学習指導要領を踏まえながら、教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)の1年次講義科目である「特色あるカリキュラムづくりの理論と実際」(前期必修)、および「学習指導要領とカリキュラム開発」(後期必修)の成果として、特色あるテーマをもとに校種をつなぐモデルカリキュラムを開発提案するものである。本論文の前提として、岩手県盛岡市近郊の少子高齢化による人口減少による学校統合地域をモデルにすること、小中の接続教育を念頭においたモデルカリキュラムにすること、を条件として、学力向上、地方創生、通常学級における特別支援教育の充実という岩手の教育課題を念頭に、総合的学習、特別支援教育、算数・数学、外国語、の4つの課題テーマを取り上げ、独自のモデルカリキュラムを提案し、岩手の学校教育実践の発展向上を目指す研究である。本論文は、そのうち、算数・数学、外国語の全体カリキュラム案を提示する。

1. 本研究の趣旨・目的

本研究の目的は、少子高齢・人口減少が進む岩手県の盛岡市近郊地域(参考モデルとして紫波町)の学校を想定して、岩手の教育課題に即した一定のテーマに焦点化しつつ、小中接続のモデルカリキュラムを提示することである。

平成29(2017)年改訂の学習指導要領では、将来の不確実で多様な社会を見据え、「社会に開かれた教育課程」が強調されている。それは、「よ

りよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という言葉に象徴されるように、学校教育で学んだことが将来の社会において活用できる力の育成を目指している。学校教育では、子どもたち個々に生涯にわたって学び続ける力を育て、自らの人生を切り拓く(自己創造)とともに、学校内外の多様な他者と協働して、これからの社会のあり方を考える(社会創造)力を育むことが求められている。そして、学校教育において子どもたちに育む

* 岩手大学大学院教育学研究科, ** 岩手県紫波町教育長,

*** 岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻

力を、今回改訂の学習指導要領では「資質・能力」という言葉で強調している。

その際、学校が家庭や地域と協働しながら、将来の社会を創る担い手を育む環境を整え、学校教育の質全般を高める必要がある。「社会に開かれた教育課程」も、学校から家庭・地域への広がり(ヨコ)と、現在の学校で学んだことが子どもの生涯発達に即して将来の社会にも開かれるという時系列的発展(タテ)の両側面を意味するといえる。

そのために、各学校では、家庭や地域と協働しつつ、子どもたちにどのような「資質・能力」を育む必要があるかという観点から目標を設定し、その力を育むのにふさわしい教育内容(教科等の内容、単元内容等)と、主体的・対話的で深い学びという授業改善の視点を生かした適切な教育方法が工夫され、その教育活動全般の有効性を適切に評価し、教育活動の絶えざる修正・改善に努めていくことが求められる。つまり、カリキュラム・マネジメントの視点から、学校を基盤としつつ保護者・地域の人々等の協力も得ながら、常に教育改善に努めていくことが学校関係者全般に求められている。

その実現に向けて、個々の子どもの成長発達に応じた「資質・能力」を伸ばすために、マクロな観点から、各教科間の関連や、各校種間の接続が重視される。教科をこえる汎用的な能力や、日常生活の事象や地域の課題は、必ずしも特定の教科等に限定されるものではなく、学際的な性格を持ちうるものでもある。

このように、これからの各学校の教員にとっては、全体鳥瞰図としてのカリキュラムをデザインできるカリキュラム開発力を高めることが、これからの時代の要請でもある。

本研究を進めるに際して、地方創生を基盤に、町行政全体のビジョンのもとに町内の3地区において小中学校を統合しつつ、独自の小中一貫教育を進めようとしている岩手県紫波町の教育課程改革の取り組みを参考にした。本論文は、同町の西部地区において2021年4月に開校される紫波西学園「西の杜小学校・紫波三中」の小中一貫教育に

資するモデルカリキュラムを提示することを目的としている。

本年度は、夏から冬にかけて、紫波町教育委員会や上平沢小学校、紫波第三中学校を実際に大学院生とともに訪問し、情報を収集しながら、モデルカリキュラムの開発に努めてきた。

そして本研究では、マクロな観点から、カリキュラムの全体像を開発する力の育成を目指し、ある程度の具体性を伴った提案とするために、特に以下の条件を付した。

①岩手県における少子高齢化による人口減少と、それに拍車をかけることとなった東日本大震災の復興創生をも考慮し、少子化の進む盛岡市近郊地域の学校を想定すること。

②校種を超えて、個々の子どもの成長発達の全体を見通しながら教育活動に取り組むことを考慮し、小中一貫の教育カリキュラムを開発すること。

③岩手の教育課題に照らして、4つの具体的テーマ、すなわち、具体的には、総合的学習、特別支援教育、算数・数学、外国語の4テーマとした。

以上の条件を踏まえ、本稿では算数・数学、外国語の二つのテーマについて、育みたい「資質・能力」と単元内容の系統的発展を念頭に置いた全体計画案、年間指導計画案等のモデルカリキュラムを提示するものである。

もちろん、本論のモデルカリキュラムは、地域の各学校が具体的な小中一貫カリキュラムを構想する際の一つのたたき台であって、絶対不変な計画案ではありえない。本研究で提示するモデルカリキュラムは、各学校において実践されるなかで、修正・改善されることになる。

また、本研究で提示するモデルカリキュラムの成果は、ある程度の期間における各学校での実践活用を通じて、その有効性や正当性が検証されていくと考える。

本研究は、これからの学校教員に求められる、カリキュラム開発力育成の出発点として位置づけられるものである。(文責：田代高章)

2. 方法

今年度は、新型コロナ禍のため変則対応とした。

①前期での県教委訪問調査は中止、代わりに、前期講義「特色あるカリキュラムづくりの理論と実際」7月6日時に、岩手の教育課題に即した4テーマについて岩手県教育委員会から4名の指導主事に来訪いただき、助言をいただいた。②その助言を踏まえ、全体最終発表会を8月3日に開催し、岩手県教委から後澤主任指導主事が来訪・講評をいただき、それをもとに修正カリキュラムデザインを構想。③教職大学院における今回のモデル地区紫波町の小中一貫カリキュラムデザイン原案提起について、統合予定の町内小中学校長への説明会を8月31日に紫波町教育委員会において実施（主担当：田代が説明・質疑対応）。④10月13日に後期講義「学習指導要領とカリキュラム開発」の時間を使い、紫波町教育委員会訪問・教育長講話、上平沢小学校訪問にて授業観察、情報収集・質疑応答を実施。⑤12月15日に同講義の枠で、紫波第三中学校を訪問し、授業観察、情報収集・質疑応答を実施。⑥12月22日の中間報告会に紫波町教育委員会から大学院来訪、侘美教育長による助言をいただく。⑦1月26日の最終報告会にて、再度、紫波町教育委員会から来訪、侘美教育長から4テーマの最終プランに関する講評をいただいた。上記のような経緯を踏まえ、本論文の元となる小中一貫グランドデザイン原案を策定した。

（文責：田代高章）

3. 小中接続モデルカリキュラムの提案

1) 算数・数学について

(1) 現状

PISA 調査¹⁾の数学的リテラシーの国際順位は、日本は世界で5~10位以内に安定して入っている。しかし、日本の習熟度レベル別の生徒の割合を見た時に、上位層のレベル5,6の生徒が減少し、一方で下位層の子どもが増加しており二極化傾向が見られる。またPISA調査では、生徒の学校・学校外におけるICT利用についても調査²⁾が行われた。これは学校の授業場面や家庭でのイ

ンターネット利用状況など、様々な場面での利用状況に関する調査であったが、日本はほとんどの項目においてOECD平均を下回っていることが分かった。

岩手県の児童生徒は、令和元年度学習定着度状況調査^{3) 4)}の質問紙調査⁵⁾において「数学の授業はよくわかりますか」という質問に対し肯定的回答が、小学校5年生で85%（前年度87%）、中学校2年生で72%（前年度72%）であった。また「数学は好きですか」という質問に対し、小学校5年生で65%（前年度68%）、中学校2年生で58%（前年度58%）といずれも他教科に比べて低い傾向にある。さらに、「データの活用」の分野に関わる小学校5年生の「数量関係」の正答率が60%（前年度60%）、中学校2年生の「資料の活用」の正答率46%（前年度61%）と、中学2年生での落ち込みが顕著である。これまで岩手県では、中学校数学の正答率が特に低い傾向が長く続いており、記述問題での誤答と無解答の割合が高い傾向にある。

また、平成31年度高等学校基礎力確認調査⁶⁾において、高校1年生「資料の活用」の正答率が68.1%、高校2年生の「データの分析」の正答率が54.9%と他分野に比較して低くはないものの、より正答率が上がる余地はあると考えられる。

今回、カリキュラム開発を行う岩手県中央部の対象地域（紫波町）では、令和2年度全国学力・学習状況調査の算数数学で、小学6年生の記述式問題に対する無解答率は中学校に比べて低いものの、誤答率は高い。中学3年生の記述問題に対しての無解答率が高く、「データの活用」の分野でも落ち込みが見られる。例えば、小学校6年生での「棒グラフを棒の長さに着目して判断し、判断の理由を記述できる（記述）」という質問に対し無解答率は低いものの誤答率は高く、中学校3年生での「データの特徴を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる（記述）」という質問に対し、誤答率と無解答率がともに高かった。つまり、記述での無解答率の高さ、特に中学校における記述での無解答率の高

さが窺える。

まとめると校種が上がるごとに数学への関心・意欲さらには正答率が低下する傾向が見られる。「データの活用」の分野においても落ち込みが見られ、特記述においてそれが顕著であり、そこから困難な課題に対して立ち向かう力が弱いと想像できる。

(2) カリキュラム開発の視点

本カリキュラムを開発するにあたっては、学習指導要領（平成29年告示）改訂^{7) 8) 9)}の基本方針である「社会に開かれた教育課程」の実現、「育成を目指す資質・能力」の明確化、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を踏まえている。岩手県中央部紫波町にある小中一貫校をモデルとし、本論では、小・中・高等学校の接続を意識してカリキュラム開発を行った。

具体的には、高等学校卒業までに算数・数学科で目指す人間像を想定した。まず、12年間で育成したい資質・能力を整理^{7) 8) 9)}し、領域ごとの系統性を明らかにすることとした（図表3）。そして、主体的に学習に取り組む態度については、社会的実践力との関連付けを行っている。また、教科横断的・総合的で探究的な学びの実現のため、「データの活用」分野と地域を関連付けた地域教材の開発を行うことにした（図表2）。地域に目を向けながら、算数・数学の社会的有用性も高めることを目指している。さらに、岩手県教育委員会の算数・数学の指導にあたっての基本的な考え方では、「問題発見・解決の過程」「より深い理解」「誤答やつまずきの表出とその解消」を挙げている。そこで、小学校と中学校、中学校と高等学校における校種間接続の視点も交えながら、その充実のための取り組みを提案した。

この地域においては「データの活用」の分野に落ち込みが見られること、さらには、データの活用能力は、これからの時代を生き抜きかつ牽引していくために必要不可欠な力であり、「データの活用」の分野を軸にしたICT活用の算数・数学のカリキュラム開発を行うことにした。また、カリキュラム開発にあたっては、「社会とのつながり

や教科横断的な学び」、「ICTの活用（Gigaスクール構想）」、「思考力や情報活用能力を高め、これからの社会の発展に寄与する人材を育てる」ことを意識した。算数・数学の授業において、積極的にICT（タブレットにおけるロイロノートなどの授業支援アプリ）を活用することにする。

「データの活用」の分野では、小学生段階ではグラフのどこに着目し何を判断するかに関わる力を高め、中学生段階ではデータからどのようなことが言えるかを自分なりに表現できる力を身に付けさせ、高校段階ではデータがもつ意味やその有用性についての理解を深めさせたい。

(3) モデルカリキュラムの提案とその特質

グランドデザイン（図表1参照）の特質は以下の通りである。

1点目は、この地域で落ち込みが見られる「データの活用」領域を中心とした教科横断的、社会とのつながり、総合的で探究的な学びを意識した。

2点目は、ICT（タブレット等）を利用した「データの活用」領域と地域を関連付けた地域教材のカリキュラムの開発（図表2参照）を行った。このことにより教職員と児童生徒とで指導目標の共有を図ることができるとともに、課題となっている内容領域を日常の問題に活用することでより深い理解につなげることができる。そして、算数・数学が社会に役立っていることを実感し、学びに対しての主体性を高めていくことができる。探究のプロセスを実践することで、社会的有用性、問題解決の喜びなど、算数・数学科の本質の学びを経験させていきたい。

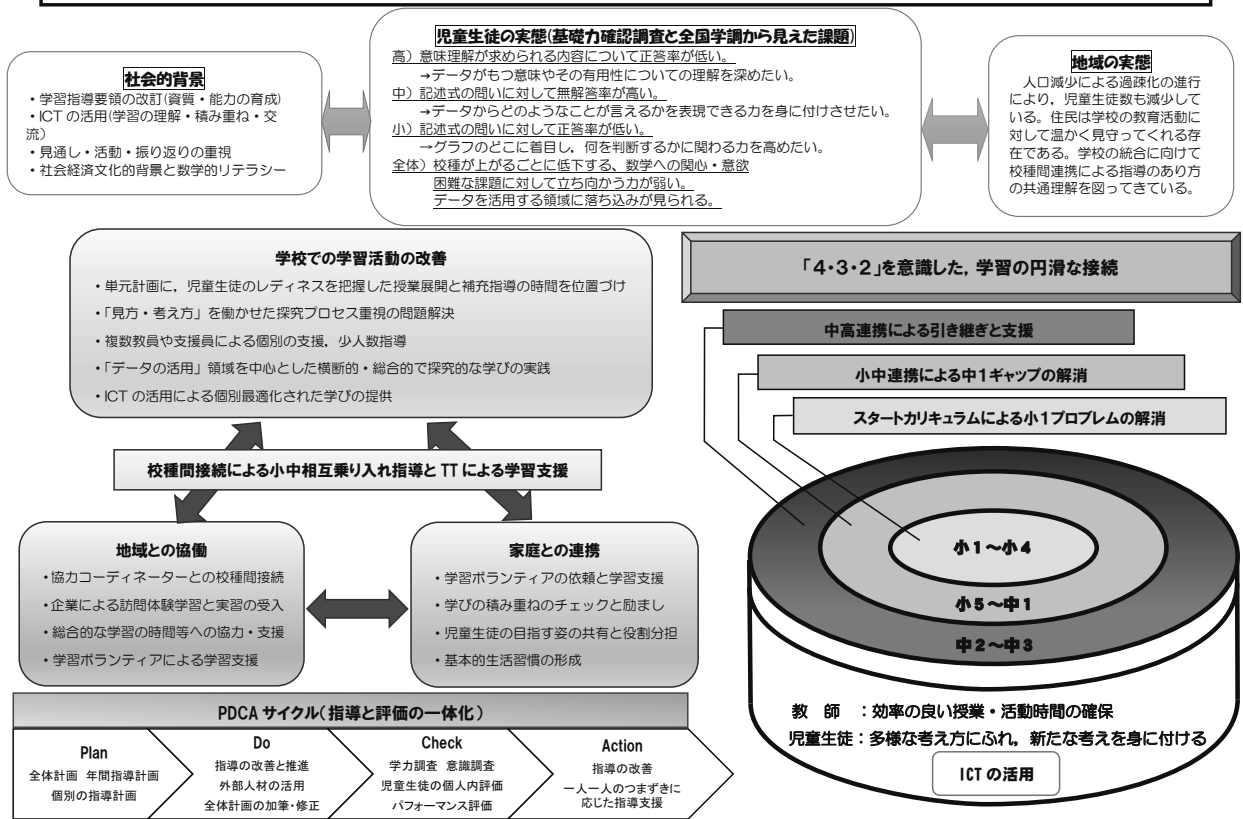
タブレットを活用する際は、グループ活動の時間を設け、タブレット活用に精通している児童生徒を各グループに割り当て、リトルティーチャーとしてタブレットの活用を苦手とする児童生徒をサポートする。また、ICTを活用した算数数学の授業を行うことのメリットは以下の通りである。

- ・メリハリの効いた効率の良い授業を行うことができる。

- ・考える時間、自ら発見する時間、本質を見極める時間、振り返り定着させる時間に割り当てるこ

算数・数学のグランドデザイン（図表1）

算数・数学科の目標『数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成することを目指す』



とができる。

- ・自ら考える時間を確保することで、深い思考力を育むことができる。
- ・級友の考えを共有することで、多様な考え方を知り学ぶとともに、新たな考えを身につけることができ、さらに、シンキングツールを活用することで本質を自ら発見する力を養うことができる。
- ・グループワークを通じた協働活動・コミュニケーション能力を高めることができる。
- ・授業効率を上げることで授業のまとめとして5~10分間、本時の振り返りテスト等（練習問題を解くなど）を、各節の終わりにはその節を振り返るテスト等を行うことができる。（1時間程度）

3点目は、中1ギャップを解消するための「4・3・2カリキュラム」を意識した学習の円滑な接続である。校種間接続による小中相互乗り入れ指導とTTによる学習支援を行う。算数・数学科担当教員は校内コーディネーターとして学校間を行き来し、実際の授業に関わりながら学力面で児童

生徒を支援していく。また、小学校6年生段階で、中学1年生の内容を意識した指導を行うとともに、中学校1年生段階では、小学校で行われていた各単元における丁寧な振り返り（テスト等）を取り入れる。

4点目は、単元計画に児童生徒のレディネスを把握した授業展開と毎時間の振り返り、さらには各単元毎の振り返りを行うことである。ICTを授業で活用することにより、授業を効率よく行うことができ、それによって生み出された時間を毎時間と各単元毎の振り返りに当てる。

また、毎時間または各単元毎の振り返りを適切に評価することで、児童生徒のモチベーションを高めることにつながる。

5点目は、地域との協働である。地域の方々に協力コーディネーターとして学校間を行き来していただき、児童生徒理解の面で連携を支えていく。その他に、保護者や地域から募集した学習ボランティアに、実際の授業で個別の支援をしていただ

図表2 「データの活用」領域の系統性と題材

	データ領域に関わる 重点	題材・他教科との関わり	ICTとの関わり
高1	データの分析 (相関関係)	「特産品の売り上げを伸ばすための方法を考察する」 特産品の売り上げを伸ばす事を考察する上で、説明のために適切なグラフや手法を選択し、分析する。また、主張の妥当性について、批判的に考察出来るように経験していく。(地域社会・経済)	・PC (Excel) ・タブレット (ロイロノート)
中3	データの整理と分析 (標本調査)	「選挙の出口調査を行ってみよう」 紫波町長選や紫波町議選において 無作為抽出という考え方を利用して「出口調査」を行うことで「選挙速報」を行おう。(主権者教育・社会)	・PC (Excel) ・タブレット (ロイロノート)
中2	データの比較 (箱ひげ図)	「紫波町の特産品の売り上げを調べ、来年度の売り方を考えよう」 紫波町の特産品のデータを利用し、来年度の売り方を考える事で、紫波町への理解を深める。また、箱ひげ図を利用することで、複数のデータを直接比較できる良さを実感させる。(地域社会)	・PC (Excel) ・タブレット (ロイロノート)
中1	データの分析と活用 (平均・度数分布表・ヒストグラム・度数折れ線)	「部員の走力を分析しよう」 紫波三中は数年前に駅伝大会で県優勝しましたが、そのときの部員と現在の部員の1500Mの記録を比較し、分析することでチーム力アップにつなげよう。(体育・部活動)	・PC (Excel) ・タブレット (ロイロノート)
小6	データの分析と活用 (平均・度数分布表・最頻値・中央値)	「リクエスト給食ガチャを選ぼう」 いくつかあるリクエスト給食ガチャに対して満足度を設定して、どのリクエスト給食ガチャがよりよい選択なのか、データの分析を通して数学的に考える。	・PC (Excel) ・タブレット (ロイロノート)
小5	数量を表わす公式 (混み具合) 数量を表わす公式 (速さ) 円グラフや棒グラフの特徴やその使い方を理解すること	「紫波町の人口密度を考えよう」 紫波町の人口密度を計算で求める。また、その後社会で様々な都市の人口密度を求めて、混み具合を社会の学習で使う一つの学習ツールであるという意識をもつ。(社会) 「歩く速さを比べよう」 10メートル歩くのにかかる時間と30メートル歩くのにかかる時間を比べるとはどのようにすれば良いかを考え、速さの求め方を考える。 「自分の生活を見直そう」 自分の生活がどのようにされているのか円グラフでまとめて、データで自分の生活を振り返って、よりよい生活態度を考える。	・タブレット (ロイロノート)
小4	折れ線グラフの特徴やその使い方を理解すること 表やグラフを読んで、物事を考えること	「成長をグラフ化しよう」 体育などの縄跳びの回数などを記録し、それをグラフ化することで自分の成長をデータで分析する。(体育) 「ケガの対策を考えよう」 学校のケガの種類とケガをした場所を二次元表でまとめて、どうすれば学校がより安全な場所になるのかを考える。	・タブレット (ロイロノート)
小3	データを分類整理し、表に表したり読んだりすること 棒グラフの特徴やその使い方を理解すること	「これからの紫波町にとって大切なことを考えよう」 紫波町の人口推移とそれに伴った土地利用の変化に気付かせ、紫波町のこれからのことを考える(社会)	・タブレット (ロイロノート)
小2	簡単な表やグラフを用いて表したり読んだりすること	「どれくらいとれたかな」 育てた作物から実がどれだけとれたかを調べ、見やすくまとめる(生活)	・タブレット (ロイロノート)
小1	ものの個数について、簡単な線や円に表したり、それらを読み取ったりすること	「なんびきつれるかな」 魚つりゲームを通して、つった魚の種類ごとに見やすくまとめる(生活)	・タブレット (ロイロノート)

く。放課後に「寺子屋」のような塾の場を学校に設定し、教員や学習ボランティアが支援することで、学力を伸ばしたいと考える児童生徒を地域全体で支援していく。本人の希望と担任などとの面談をもとに、学力面・経済面など、様々な困難のある児童生徒を支えていきたい。

6点目は、ICTを活用した一人一人のつまずきへ対応した個別最適化の学びの提供である。小学校1年生からテスト等のデータを蓄積していき、自分がどの分野を苦手としているか把握するとともに教師側も児童生徒のレディネスの把握にいかす。児童生徒にAIドリル学習を取り入れ、各自が把握した苦手分野の定着に活用する。それにより、探究的な学習に十分な時間を確保することができる。各自のAIドリル学習でも定着を図れな

かった分野については、蓄積されたデータを参考に地域の方々に支援していただく。

7点目は、家庭との連携である。学校と家庭で「目指す生徒像」、「子どもの成長のイメージ」を共有し、学校と家庭が役割分担しながら子どもの成長を促していく。

8点目は、資質・能力の系統表(図表3参照)において、高校3年生までの資質・能力を、学年段階に応じて領域別にまとめたことである。児童生徒のつまずきを振り返る、次学年以降を見据えるといった12年間での指導に効果的に活用したい。学びに向かう力・人間性等については、社会的実践力を関連付けたことで、「社会参画」「人間関係形成」「自律的活動」という視点で、より細やかに児童生徒の成長を見とれるようにした。

(4) 課題

人口減少による過疎化の進行により児童生徒も減少している。農地は多いが、県北から県南まで通勤しやすい立地条件にあることから、保護者の6割は会社員である。住民は学校の教育活動に対して温かく見守ってくれる存在であり、学校の統合に向けて校種間連携による指導のあり方の共通理解を図ってきている。

小学校と中学校、中学校と高等学校の接続のために動員するコーディネーターなどの地域人材を確保し、必要なタイミングで必要な専門人材を活用できるシステム(枠組み)も必要であろう。

中学校と高等学校での「生徒の入れ替わり」や「設置者」の違いによる接続・連携の困難さの解消にも留意する必要がある。この点が12年間の系統性をもたせたカリキュラムの最大の課題と考える。その接続の際に、算数・数学のテスト等のデータを蓄積してきた児童生徒の苦手分野やつまずきを適切に引き継ぐことが大切である。高校進学

図表3 【算数・数学科における12年間で身に付けたい資質・能力】

	数と計算 数と式	図形	測定 変化と関係	データの活用	社会参画	人間関係形成	自発的活動
高3・2	・数列や関数の値の変化に着目し、極限について考察したり、いろいろな関数の局所的な性質や大域的な性質に着目し、事象を数学的に考察したり問題解決の過程や結果を振り返って統合的・発展的に考察したりする ・実数の性質や等式の性質、不等式の性質などを基に、等式や不等式が成り立つことを論理的に考察し、証明する	・座標平面上の図形について構成要素間の関係に着目し、方程式を用いて図形を簡潔・明瞭・的確に表現したり、図形の性質を論理的に考察したりする ・次ぎと向きをもった量に着目し、演算法則やその図形的な意味を考察する ・図形や図形の構造に着目し、それらの性質を統合的・発展的に考察する	・関数関係に着目し、事象を的確に表現してその特徴を数学的に考察する ・関数の局所的な変化に着目し、事象を数学的に考察したり、問題解決の過程や結果を振り返って統合的・発展的に考察したりする ・連続的な変化の規則性に着目し、事象を数学的に考察する	・確率分布や標本分布の性質に着目し、母集団の傾向を推測判断したり、標本調査の方法や結果を批判的に考察したりする	・数学の社会的有用性を認識し、社会の発展に数学を活用しようとする	・協働的な活動とおとして他者の考えを的確に理解し、より妥当な考えを作り出そうとする	・粘り強く柔軟に考えを深め、批判的に考察し、よりよく問題解決しようとする
高1	・命題の条件や結論に着目し、集合の考えを用いて論理的に考察する ・既習の数や文字式の計算の方法と関連付けて、数や式を多面的にみたり適切に応じた適切に変化したりする	・三角比を用いて図形の構成要素間の関係に着目し、図形の性質や計量について論理的に考察し表現する ・図形の構成要素間の関係などに着目し、図形の性質を見出し、論理的に考察する	・関数関係に着目し、事象を的確に表現してその特徴を表、式、グラフを相互に関連付けて考察する	・社会的事象などから設定した問題について、データの数らばりや変量間の関係に着目し、適切な手法を選択して分析を行い、問題を解決したり、解決の過程や結果を批判的に考察し判断したりする ・不確実な事象に着目し、確率の性質などに基づいて事象の起こりやすさを判断する	・数学の社会的有用性を認識し、積極的に数学を活用しようとする	・協働的な活動を通して、他者の考えを的確に理解し、よりよく問題解決しようとする	・粘り強く考え、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする
中3	・数の範囲に着目し、数の性質や計算について考察したり、文字を用いて数量の関係や法則などを考察したりする	・図形の構成要素の関係に着目し、図形の性質や計量について論理的に考察し表現する	・関数関係に着目し、その特徴を表、式、グラフを相互に関連付けて考察する	・標本と母集団の関係に着目し、母集団の結果を批判的に考察したりする	・数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して、数学を生活や学習に生かそうとする	・多様な意見を認めながら、批判的に考え、よりよく問題解決しようとする	・粘り強く考え、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする
中2	・文字を用いて数量の関係や法則などを考察する	・数学的な推論の過程に着目し、図形の性質や関係を論理的に考察し表現する	・関数関係に着目し、その特徴を表、式、グラフを相互に関連付けて考察する	・複数の集団のデータの分布に着目し、その傾向を比較して読み取り批判的に考察し判断したり、不確実な事象の起こりやすさについて考察したりする	・数学的活動の楽しさや数学のよさを感じて、数学を生活や学習に生かそうとする	・多様な意見を認め、多面的に捉え、検討してよりよいものを求めようとする	・粘り強く考え、問題解決の過程を振り返って評価しようとする
中1	・数の範囲を拡張し、数の性質や計算について考察したり、文字を用いて数量の関係や法則などを考察したりする	・図形の構成要素や構成の仕方に着目し、図形の性質や関係を直観的に捉え論理的に考察する	・数量の変化や対応に着目して関数関係を見だし、その特徴を表、式、グラフなどを用いて考察する	・データの分布に着目し、その傾向を読み取り批判的に考察し判断したり、不確実な事象の起こりやすさについて考察したりする	・数学的活動の楽しさや数学のよさに気づいて数学を生活や学習に生かそうとする	・意見を出し合い、多面的に捉え、検討してよりよいものを求めようとする	・粘り強く考え、問題解決の過程を振り返って評価しようとする
小6	・数とその表現や計算の意味に着目し、発展的に考察して問題を負い出すとともに、目的に応じて多様な表現方法を用いながら数の表し方や計算の仕方などを考察する	・図形を構成する要素や図形間の関係などに着目し、図形の性質や図形の計量について考察する	・伴って変わる二つの数量やそれらの関係に着目し、変化や対応の特徴を見だし、二つの数量の関係を表や式、グラフを用いて考察する	・身の回りの事象から設定した問題について、目的に応じてデータを収集し、データの特徴や傾向に着目して表やグラフ的に表現し、それらを用いて問題解決したり、解決の過程や結果を多面的に捉え考察したりする	・数学のよさに気付く学習したことや生活や学習に活用しようとする	・意見を出し合い、多面的に捉え、検討してよりよいものを求めようとする	・粘り強く考え、問題解決の過程を振り返る
小5・4	・数とその表現や数量の関係に着目し、目的に合った表現方法を用いて計算の仕方などを考察する	・図形を構成する要素及びそれらの位置関係に着目し、図形の性質や図形の計量について考察する	・伴って変わる二つの数量やそれらの関係に着目し、変化や対応の特徴を見だし、二つの数量の関係を表や式を用いて考察する	・目的に応じてデータを収集し、データの特徴や傾向に着目して表やグラフ的に表現し、それらを用いて問題解決したり、解決の過程や結果を多面的に捉え考察したりする	・数量や図形に主体的に関わり、学習したことを生活や学習に活用しようとする	・友達と工夫したり、協力したりして、検討しようとする	・積極的に考え、数学的に表現・処理したことを振り返る
小3・2	・数とその表現や数量の関係に着目し、必要に応じて具体物や図などを用いて数の表し方や計算の仕方などを考察する	・平面図形の特徴を捉え、図形を構成する要素に着目して捉えたり、身の回りの事象を図形の性質から考察したりする	・身の回りにもあるものの特徴を捉え、量や単位を用いて的確に表現する	・身の回りの事象をデータの特徴に着目して捉え、簡潔に表現したり考察したりする	・数量や図形に進んで関わり、数理的な処理のよさに気付く生活や学習を活用しようとする	・友達と工夫したり、協力したりして、問題を解決しようとする	・数学的に表現・処理したことを振り返る
小1	・もの数に着目し、具体物や図などを用いて数の数え方や計算の仕方を考える	・もの数に着目して特徴を捉えたり、具体的な操作を通して形の構成について考えたりする	・身の回りにもあるものの特徴を捉え、量や大きさの比べ方を考える	・データの個数に着目して身の回りの事象の特徴を捉える	・数量や図形に親しみ、進んで学習に関わろうとする	・友達と共に、問題を解決しようとする	・算数で学んだことのよさや楽しさを感ぜながら学ぶ
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	思考力の芽生え 数量や図形、構構や文字などへの関心・感覚 社会生活との関わり 協同性 自立心						

際に他地域の高校へ進学する「外への」生徒がいる一方で、他地域の中学校から進学してくる「内への」生徒がいる。その両者にとって有意義なカリキュラムとなるように配慮する必要がある。

最後に、算数・数学の社会的有用性を感じさせる教育と、高校受験や大学受験のために必要となる教育をどう両立していくか検討する必要がある。実社会で役立つようにという想いを込めて作成したカリキュラムではあるが、受験に役立たないようでは児童生徒の自己実現の足かせとなってしまふ。受験と社会での生活の両方において有益なカリキュラムを今後も検討していきたい。

（文責 阿部尚史・川村一真・大村岳・佐々木龍己）

2) 外国語について

(1) 外国語科教育における現状

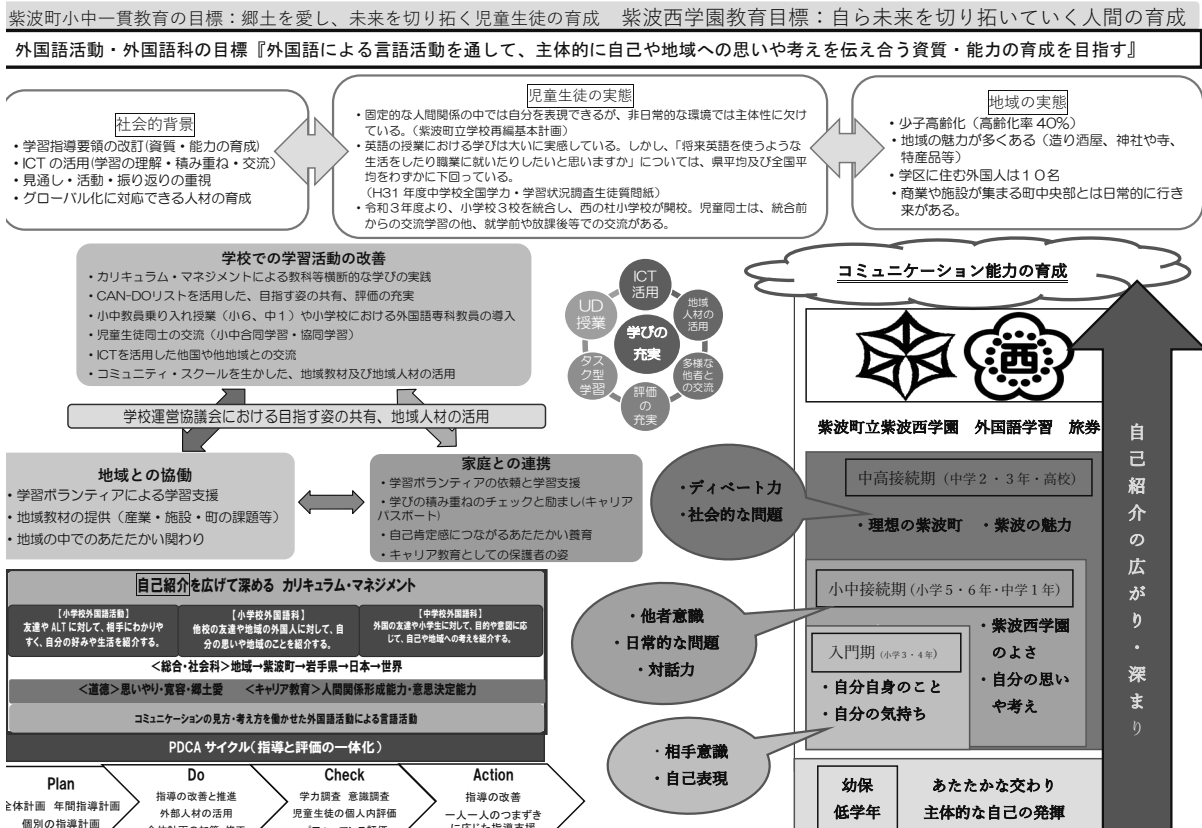
グローバル化が進展する中で外国語科教育には、多様な他者との対話の中で自分の考えなどを形成、再構築できる「コミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせたコミュニケーション

を図る力の育成、および国際的視野に立って多面的思考ができる人材の育成が求められている。

紫波町では、平成31年度全国学力・学習状況調査中学校調査において、「英語の勉強が好き」と答えた生徒や、「授業では、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が行われていたと思いますか」等の学習経験に対して肯定的に回答した生徒の割合が、県平均や全国平均を大きく上回った。しかし、意欲や達成感をもって授業に臨んでいる生徒の姿が伺える一方、「あなたは将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思いますか」の項目では、肯定的な回答が県平均及び全国平均を下回った。従来からの質の高い授業に加え、児童生徒が、世界の様々な人や物を自分との関わりという視点で捉え、培った力を生涯において働かせていく自己の姿を描けるような教育課程の一層の工夫が求められている。

さらに紫波町では、小中一貫教育による「教育内容や学習活動の質的・量的充実」が重要な視点となっている。中1ギャップの解消、「思考・判

図表4 紫波町の外国語活動・外国語科教育グランドデザイン



「断・表現」を醸成することの日常化、「修得・習得」主義の指導を実現することなどを通して、紫波町民憲章にも掲げられる「教養・学習」「交流」を推進する一町民として、児童生徒を育てたい。そのとき、世界や社会とつながるツールである外国語、またコミュニケーションの力を育む外国語教育の役割は大きい。外国語教育の充実は必須の課題である。

よって、紫波西学園では、児童生徒が「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を生かし、集団の中でともに考え、理解し合い、多面的・多角的な思考力・判断力・表現力等をより一層伸ばし、それらの学びを人生や社会に活かそうとする資質・能力の育成が求められる。

(2) カリキュラム開発の視点

前項の実態と、紫波町の小中一貫教育の目標「郷土を愛し、未来を切り拓く児童生徒の育成」、及び紫波西学園の教育目標「自ら未来を切り拓いていく人間の育成」のもと、外国語教育全体計画を作成した。

まず、外国語活動・外国語科の目標として、「外国語による言語活動を通して、主体的に自己や地域への思いや考えを伝え合う資質・能力の育成」を掲げた。これは、外国語科及び各教科等を通して児童生徒が自己や地域への思いや考えを広げたり深めたりし、それらを目的や場面に応じて表現したり伝え合ったりする資質・能力を高め、よりよい未来について他者と意見が交わせる人材の育成に寄与したいと考えたものである。そして、小中の学びを貫く柱として「自己紹介活動」を設定し、発達段階に応じた、内容やコミュニケーションの仕方についての目標を提示した。スパイラルに取り組む「自己紹介活動」があることで、児童生徒が、日本の、あるいは世界の様々な人、もの、ことについて、自己との関わりという視点で捉えるとともに、児童生徒が9年間の見通しを持って学び、また、自己の成長を実感できるようにした。

また、紫波町では、小中一貫教育の推進に関わってコミュニティ・スクールを導入する。学校運営協議会等を通じて紫波町の魅力あふれる地域素材

図表 5

【令和3年度】

紫波町立紫波西学園 外国語教育 到達目標『CAN-DO リスト』

◎育成したい児童生徒の姿
 ★地域の良さを理解・発信し、より良い地域社会を創造できる児童生徒
 ・地域や日本、世界の様々な人・物事について、自分との関わりという視点でとらえようとする。
 ・自分の思いや考えが効果的に伝わるよう、相手のことを知ろうとする。
 ・コミュニケーションのツールとして、表現や伝え方に留意して、言葉を使おうとする。

◎Can-Do リスト

ステージ	学年	聞くこと	読むこと	話すこと（やりとり）	話すこと（発表）	書くこと	
中高接続期	中3	自分が考える「理想の紫波町」というテーマで、英語でディベートすることができる。					
	中2	自分の住む町の魅力を、英語版ガイドブックを作成し、紹介することができる。					
	中1	自分の中学校1年目の思い出を、英語で紹介することができる。					
小中接続期	小6	自分が中学校で頑張りたいことを、英語で紹介することができる。					
	小5	自分のあこがれの人物のことを、英語で紹介することができる。					
	小4	自分の好きなものを、英語で紹介することができる。					
外国語学習入門	小4	自分自身のことを、英語で紹介することができる。					
	小3	自分自身のことを、英語で紹介することができる。					

や地域人材を授業に活用すること、キャリア教育として児童生徒とともに外国語を学び続ける姿を家庭や地域の方々が示すこと、児童生徒が生活する地域そのものを学習することで児童生徒が物事を教科等横断的な視点で捉えられるようにすることは、児童生徒にとって、自己と社会をつなげて考え、将来への見通しを持って学ぶことにつながると考える。

以上のことから、「外国語による言語活動」をベースに、「自己紹介活動」を柱として、地域との関連やキャリア教育に重きを置いた、教科等横断的なカリキュラム開発を行った。

(3) モデルカリキュラムの提案とその特徴

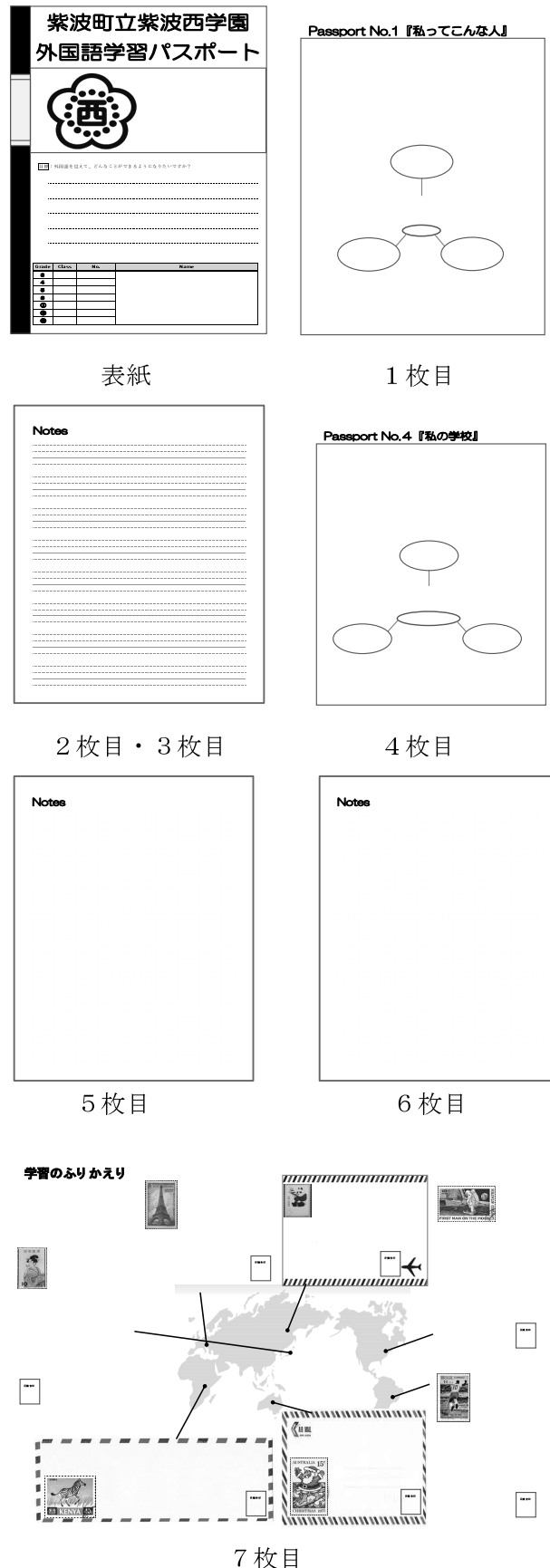
紫波西学園の実態を踏まえたカリキュラム提案として、小中9年間を視野に入れた外国語科グラウンドデザイン（図表4）、CAN-DOリスト（図表5）、

自己紹介パスポート(図表6)、単元計画例(図表7)を作成した。それぞれの特徴について述べる。

まず、外国語科グランドデザインについてである。グランドデザインでは3点の工夫をした。1点目は、校種間接続である。まず、児童生徒が外国語を学習するのは小学3年の外国語活動からであるが、コミュニケーションの素地は、就学前からの家庭や地域における温かい人と人との関わりから始まるため、幼保からのつながりを示した。また、中1ギャップ解消のため、小中の学びの連続性を、特に大事にしたいこととして表した。そして、小中を貫く「自己紹介活動」をその中心に据えた。2点目は、コミュニティ・スクールを生かした家庭や地域との連携の明示である。地域人材の活用とともに、児童生徒を通して外国語科教育にふれることで保護者や地域の方々も生涯を通して教養・学習をしていくこと、その姿こそが児童生徒にとってのキャリア教育になることを示した。3点目は教科等横断的なクロスカリキュラムである。児童生徒の学びは、外国語活動・外国語科の時間だけのものではなく、道徳教育やキャリア教育による心情や能力の成長、総合的な学習の時間や社会科における知識や思考力等の成長に関連して深まるものとする。日頃から、それらの関連を意識して指導にあたる大切さを示した。

次に、CAN-DOリストについてである。CAN-DOリストは、児童生徒の学習状況を把握・検証しながら、7年間の学びに連続性・継続性を確保することに活用できる。今回は、小中一貫教育の主旨を踏まえ、小学校3年から中学校3年までの7年間の、外国語学習入門期(小学校3,4年)、小まとめ・小中接続期(小学校5,6年、中学校1年)、発展・中高接続期(中学校2,3年)とし、「自己紹介活動」の到達目標のもと、「聞くこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」の3領域または「書くこと」「読むこと」を加えた5領域の、具体的な目標を示した。この目標をもとに指導の評価と改善を図ることが求められる。児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習の意義や価値を実感できるようにしたい。

図表6 自己紹介パスポート



図表7 単元計画例

【地域素材とカリキュラム・マネジメントの視点からの単元事例】	
小学校第4学年 Lesson7 What do you want ?	
単元目標	紫波町オリジナルピザをつくろう
関連教科等	第3学年 【社会科】 「わたしたちのまち 紫波町」 第4学年 【社会科】 「岩手県の様子」 第3・4学年 【図画工作】 「にこにこべんとう ベタンコランチ」（参考）
単元について	社会科で学習した 紫波町の特産品 を取り入れながら、紫波町らしさがアピールできるパフェやピザを考える。お店屋さんの形式で、必要な食材を集め、パフェやピザを作る。できあがったパフェまたはピザを紹介し合い、感想を伝え合う。
単元の流れ	1・外国人が紫波の旅行に来た場面を想定し、単元のゴールを見通す。 ・紫波町のスーパーマーケットの写真と世界の市場の様子を比べる。 ・ALTに、日本独特の食材や紫波町に来ておいしいと感じた食材について話を聞く。 2・様々な食材の言い方に慣れ親しむ。 ・欲しいものを尋ねたり答えたりするときの言い方に慣れ親しむ。 ・紫波町の特産品の英語での言い方を知る。（ブドウ、ナシ、小麦） 3・「紫波パフェ」「紫波ピザ」に必要な食材を、お店屋さんごっこの形式で集める。 【図工：集めた食材を調理して、「紫波パフェ」「紫波ピザ」を工作する】 4・自分の作った「紫波パフェ」「紫波ピザ」を紹介し合い、感想を伝え合う。
家庭・地域	・家庭学習として、児童の作った「紫波パフェ」「紫波ピザ」の紹介を聞き感想を言う。
自己紹介へのつながり	【郷土】紫波町の特産品 【言語】I want to ~. の言い方

【キャリア教育の視点からの単元計画例】	
小学校第6学年 Lesson10 I have a dream.	
単元目標	将来の夢を紹介しよう
関連教科等	第3学年 【社会科】 「はたらく人とわたしたちの暮らし」 第6学年 【道徳】 「かがやく自分を求めて」希望と勇気、努力と強い意志
単元について	教科書で紹介されている職業の他に、 紫波で働く人たちの職業 も取り入れる。様々な職業の言い方を学習した上で、自分は 将来どのような職業 に就きたいのか、自分の将来の夢を発表し合う。その目標を実現するために努力し続けようとする意思を高める。
単元の流れ	1・教科書で紹介されている職業や紫波で働く人たちの職業を思い出し、職業に対する関心をもって、単元のゴールを見通す。 ・紫波で働く人たちの職業（酒屋、農家、住職など）を含めた様々な職業の英語での言い方を学習する。 2・世界の小学生の将来になりたい職業を聞き、世界には様々な職業があることを知る。 ・様々な職業の英語での言い方に慣れ親しむ。 3・昨年卒業した小学6年生の将来の夢を話す様子を見て、発表への見通しをもつ。 ・自分の将来の夢とその理由を考える。 ・職業名の表記に慣れ親しむ。 4・将来の夢を紹介するときの表現や理由の言い方に慣れ親しむ。 5・例文を参考に、将来の夢やその理由について 自己紹介パスポート に書く。 6・将来の夢とその理由を発表し合い、感想を伝え合う。 【道徳：将来の夢を実現させるにあたって、努力し続けようとする意思を養う】 夢に向かって進む人はなぜ輝いているのかを考え、自ら努力し続けようとする意欲を高める。 7・夢を叶えるために努力している地域の方をゲストティーチャーとして迎え、話を聞き、将来に向けての考えを深める。
家庭・地域	・働く人やゲストティーチャーとして、「夢」「働くということ」について語る。 ・家庭学習として、家族の職業の言い方を児童とともに調べる。
自己紹介へのつながり	【キャリア教育】意思決定能力 【言語】I want to be a[an]～. I like ～. I have ～.

【小中接続の視点からの単元計画例】		
小学校第6学年 Lesson11 Junior High School Life/中学校第1学年 Program 7 Research on Australia		
単元目標	中学生の発表を聞き、中学校生活について尋ねよう	6年生に対して中学校の特徴や魅力について紹介しよう
関連教科等	【道徳】自己の成長、愛校心 【学活】中学校生活に向けて、進級に向けて	
単元について	中学生による中学校紹介を聞いて、中学校生活へのイメージをふくらませる。中学校でがんばりたいことを考え、発表する。	6年生に対して、中学校の特徴や魅力が伝わるように内容と表現の仕方を工夫しながら発表する。
単元の流れ	<ol style="list-style-type: none"> 1・中学生による中学校紹介から、部活動名や行事名を聞き取り、感想を伝える。 2・部活動の募集ポスターを見て、情報を読み取る。 3・中学校で入りたい部活動や楽しみたい行事について中学生に質問をする。 4・中学校の教科名の言い方に慣れ親しむ。 5・中学校でしてみたいことについて質問したり答えたりする。 6・中学生に対して、丁寧な姿勢で、中学校でしてみたいことを発表する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1・単元の見直しをもち、学校生活の紹介に必要な単語や表現を学ぶ。 2・学校生活の紹介に入れたい内容を考え、発表内容を班で話し合う。 3・発表原稿を作成する。 4・部活動ポスターを作成する。 5・相手意識を持って発表練習をする。 6・小学生にとって聞きやすい話し方を考え、工夫して発表する。 7・他の人が発表している時は、話し手が話しやすいように反応しながら、小学生の発表を聞いて質問や感想を伝える。
家庭・地域	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習での発表練習を聞き、感想を言ったり、アドバイスをしたりする。 ・小中合同授業を参観し、交流する。 	
自己紹介へのつながり	【成長】 中学校生活への思い 【言語】 I want to join/enjoy～. I like～.	【成長】 小学生への配慮 【言語】 There is / are～.

次に、自己紹介パスポートについてである。このパスポートは、小学3年から中学3年までの7年間、内容を蓄積する形で活用する。小学3年時の「自分の名前」に始まり、自己の思いや考え等、自己紹介に加えたい内容を適宜、絵や文字で綴る。また、学年末には、書き溜めたパスポートをロイロノート上で写真撮影する。加えて、実際の「自己紹介活動」の様子もロイロノートでビデオ撮影し、パスポートとともに保存する。いつでも振り返って見られるパスポートの存在は、児童生徒に自己の成長を感じさせ、学びの有用性を実感させる形成的評価のツールとしても有効だと考える。また、小学生のときから、「中学生になったら、他地域や外国の人に対して自己紹介を行う機会がある」ということを見通すことは、相手意識や他者意識を教室外にも広げ、グローバル社会の中の自分自身を捉えることに資すると考える。

最後に、単元計画例についてである。これまで

に述べた全体計画の中から、「地域素材の活用とクロスカリキュラム」「中1ギャップの解消」「家庭・社会との連携・交流とキャリア教育」の視点に関連した単元計画例を示した。タスクベースの授業、地域素材の活用、小学6年と中学1年での関連する単元内容を生かした小中合同授業の持ち方など、参考にして頂きたい。また、各単元と「自己紹介」とのつながりも記載した。児童生徒が、学習を通して、「自己紹介に用いたい言語材料」や「自己紹介で伝えたい内容」を見出すこと等、「自己紹介」は、様々な切り口から7年間の柱となり得ることを例示した。自己紹介の相手は、学級の友達に始まり、他学年、他校、小中学生の交流、地域の方、地域の外国人、オーストラリアの交流相手等、スパイラルと発展のバランスを取りながら、発達段階に応じて広げていくことを想定している。その一例を示した。

（4）課題

まず、地域人材の確保である。地域人材は、新しい学区編成のもと、学校運営協議会等を通して広げられていくものと考えられる。そこには、紫波の魅力を語る方もいれば、生活の中で英語を楽しんだり、仕事の中で英語を用いたりしている方もいるであろう。児童生徒が現在の学びと将来の自分とを結びつける一助となることを見据え、具体的な地域人材の掘り起こしが必要である。

次に、ユニバーサルデザイン授業の在り方やICTを活用した海外との交流の在り方等、すべての項目についての具体的な取り組みを示すことができなかつたことである。今後、児童生徒の実態に応じて、具体的な実施方法が検討されることを願いたい。

最後に、単元の配列や時数の配当を含んだ年間指導計画の詳細な設定には至らなかつたことである。今回は、小中一貫教育や他教科領域との関連等を意識した単元計画例を3つ挙げることで、カリキュラム開発の具体例を示した。

（文責：伊藤汐里・石田克幸・田村紘大・村上友香）

4. 考察（紫波町：侘美教育長より）

（1）全体考察

○今次教育課程における「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」をベースにおいてカリキュラム開発に臨んでいる姿勢に好感を持てる。

○各チームとも紫波町教育の現状・課題について詳細に分析・精査を図り、紫波西学園小中一貫教育の実現に資するカリキュラム開発である。

○12月に実施された中間発表会の所感をよく斟酌され、その内容に沿った付加価値の高いカリキュラムが構想・試行されていた。

○特に〔小6+中3〕の基本を〔4+3+2〕の形に組み換え、ネックである中1ギャップ解消につながるカリキュラム開発に傾注・工夫していただいた。

○各チームにおいて開発の重点をグランドデザインとして構造化し、学校の課題、現状、小中一貫

教育の実施等に向けての論点が明確になっている。

○「指導と評価の一体化」について、その今日的あり方や習得（修得）主義への道筋を含め、研鑽の効果がみられる開発である。

○知徳体を支える「非認知能力」について随所で意識されている。

●具体的な教科時数に合わせた単元（題材）ごとの時数割り当て、単元内の診断的・形成的・総括的評価の5W1Hについては学校現場の作業になるが、院生においても時間を見つけ、自分の免許教科・得意教科等の年間指導計画の策定作業を行い、現場に戻った時の教育活動に活かすことが期待される。

●一単元（題材）の配當時数の中で診断的・形成的・総括的評価や発展・補充学習を位置付けることは、研究や実践がないと至難の業であると考えられる。しかし、履修主義を脱するにはここを乗り越えなければならないと思う。指導内容の軽重、指導時間のスピードやメリハリ等を勘案し、実施に向けてチャレンジしてほしい。

（学習目標が、その時間において、「達成目標なのか」「体験目標なのか」「向上目標なのか」という吟味の必要性を検討。）

●一単元の中で、指導の流れとしての「起承転結」を考えることは重要である。例えば、ICTを活用する場面、主体的・対話的で深い学びの適時的な場面、基本事項や概念指導の時間確保等、単元全体の授業設計について周到に考える資質が望まれる。

●学習目標を成就するための「指導と評価」であることを常にセットで考える。

●いわゆる「振り返り」について、「動機づけにつながる積極的評価」及び、「学習進歩のモニタリング」という観点から、その在り方について一層の開発が急務である。

（2）算数・数学について

○地域課題解決のための方途が算数・数学教科として検討されている。

○紫波町の教育課題を理解して構想されている。

(無回答・記述・B問題について)

○図表3がよく練られている。小1から高3までの資質能力図はあまり見たことがないため。

○教育内容だけでなく、社会参画・人間関係形成・自律的活動の項目があり、非認知能力の形成につながる要素として重視されている。

○指導と評価について適切に検討されている。

(小中における単元末テストや中間・期末テストの限界について考察されている。)

●「振り返り」について「効果のある学校の特徴」6-7-9の観点から検証を進めてほしい。

●ICT活用・ICT教材・ロイロノートの活用等は現場では知見が少ないことから、院生においても地道に教材開発を進めてほしい。

●ポートフォリオ・クラウド等、データの蓄積や活用について、若い感覚で開発を進めてほしい。

●家庭学習・宿題は古くて新しい問題である。「効果のある学校の特徴」8-9-10-11の検討が急務である。

●例えば、国の学力調査における「岩手の算数・数学の現状打破」について、カリキュラムや学習を促進する教授組織等の観点から、院生から提言案があっても面白い。

(3) 外国語について

○紫波町の課題や願いが検討され構造的なグランドデザインとなっている。

○外国語学習ならではの「CAN-DOリスト」が到達目標として示され、4-3-2の発達段階ごとの構想がよく検討されている。汎用性が高い。

○幼児期から小中及び高校まで、コミュニケーション能力育成の視点から成長過程に対応した構想が検討されている。このことは非認知能力の醸成にも深く関わらせており、継続的に指導の開発が必要である。

○「学びの充実」のために6つの視点に関わり、循環されるようよく構想されている。

●「CAN-DOリスト」の単元毎時間配当、形成的評価等の総合的評価計画は、今後現場において検討するが、院生においても詳細なカリキュラムの作成を試みることを奨める。

●継続的・発展的に「自己紹介」が教材とされている。今後発達段階に応じた具体的紹介や応用的紹介へのモデル事例が望まれる

●パスポートは関心意欲の観点から面白い発想である。「効果のある学校の特徴」6-7-9-10との関わりで、その活用・運用について一層の検討が期待される。(文責：佐美淳)

5 今後への期待

前期「特色あるカリキュラムづくりの理論と実際」と後期「学習指導要領とカリキュラム開発」の2つの授業は、カリキュラムの考え方やカリキュラムを開発する力を身に付けること目的として行ったものである。この2つの授業を通して、院生は、学習指導要領で求められているカリキュラム・マネジメントの必要性や、考え方を理解するとともに、実際にカリキュラムを作成することにより、カリキュラムを開発する力が身に付いたと考える。

今年度は、来年度から小中一貫校を新たに開校し、小中一貫教育を推進する紫波町教育委員会の協力のもと、新設校を想定したカリキュラム開発に取り組んだ。紫波町教育委員会を訪問し、佐美淳教育長から紫波町の教育環境や地域の状況、そして教育にかける思いをお聞きすることができたこと、そして、上平沢小学校、紫波第三中学校の授業を参観し、目指すべき子どもたちの姿を具現化するためのカリキュラムを作成したことは、院生自身のこれからの学修及び教育活動において意義のあるものと言える。

今後、今回作成したカリキュラムを学校現場で実践し、さらに検証・工夫・改善に努めていくことを期待したい。(文責：菅野弘)

<注および引用・参考文献>

- 1) 国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査(PISA)～2018年調査国際結果の要約～」(2019)参照。(2021.1.18閲覧) https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/03_result.pdf
- 2) 国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度

- 調査(PISA)～2018年調査補足資料～」(2019)参照。(2021.1.18閲覧) https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/06_supple.pdf
- 3) 岩手県教育委員会「令和元年度学習定着度調査指導資料授業改善の手引小学校第5学年【算数】」(2019)参照。(2021.1.18閲覧) https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/025/968/sho.san.pdf
- 4) 岩手県教育委員会「令和元年度学習定着度調査指導資料授業改善の手引中学校第2学年【数学】」(2019)参照。(2021.1.18閲覧) https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/025/968/chu.su.pdf
- 5) 岩手県教育委員会「令和元年度岩手県小・中学校学習定着度状況調査結果(概要)」(2019)参照。(2021.1.18閲覧) https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/025/968/gaiyou.pdf
- 6) 岩手県教育委員会「平成31年度高等学校1年・2年基礎力確認調査結果報告」(2019)参照。(2021.1.18閲覧) https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/022/446/h31ki-so.pdf
- 7) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 算数編」(2017)参照。
- 8) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 数学編」(2017)参照。
- 9) 文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 数学編 理数編」(2018)参照。
- 10) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編」(2017)参照
- 11) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編」(2017)参照
- 12) 紫波町・紫波町教育委員会「紫波町立学校再編基本計画」(2019)参照
- 13) 紫波町教育委員会「紫波町小中一貫教育基本方針(案)」(2020)参照
- 14) 開隆堂「Junior Sunshine⑤⑥」(2020)参照
- 15) 文部科学省「Let's Try1・2」参照

謝辞：本論文作成に当たっては、岩手県教育委員会事務局学校教育課指導主事の皆様、紫波町教育長・佐美淳様をはじめとする紫波町教育委員会の皆様、上平沢小学校・紫波第三中学校の教職員の皆様など、多くの方々にご協力いただきました。あらためて感謝申し上げます。